

あさひかわ北彩都ガーデン／まちなかのオアシス・リゾート

北海道旭川市

ガーデン設計＝高野ランドスケーププランニング、緑花計画
駅広場設計＝ド・コン、ディー・エム、内藤廣建築設計事務所
文＝村田周一（高野ランドスケーププランニング株式会社）
写真＝高野ランドスケーププランニング株式会社、旭川市

ASAHIKAWA KITASAITO GARDEN / OASIS RESORT IN THE CITY Asahikawa-shi, Hokkaido

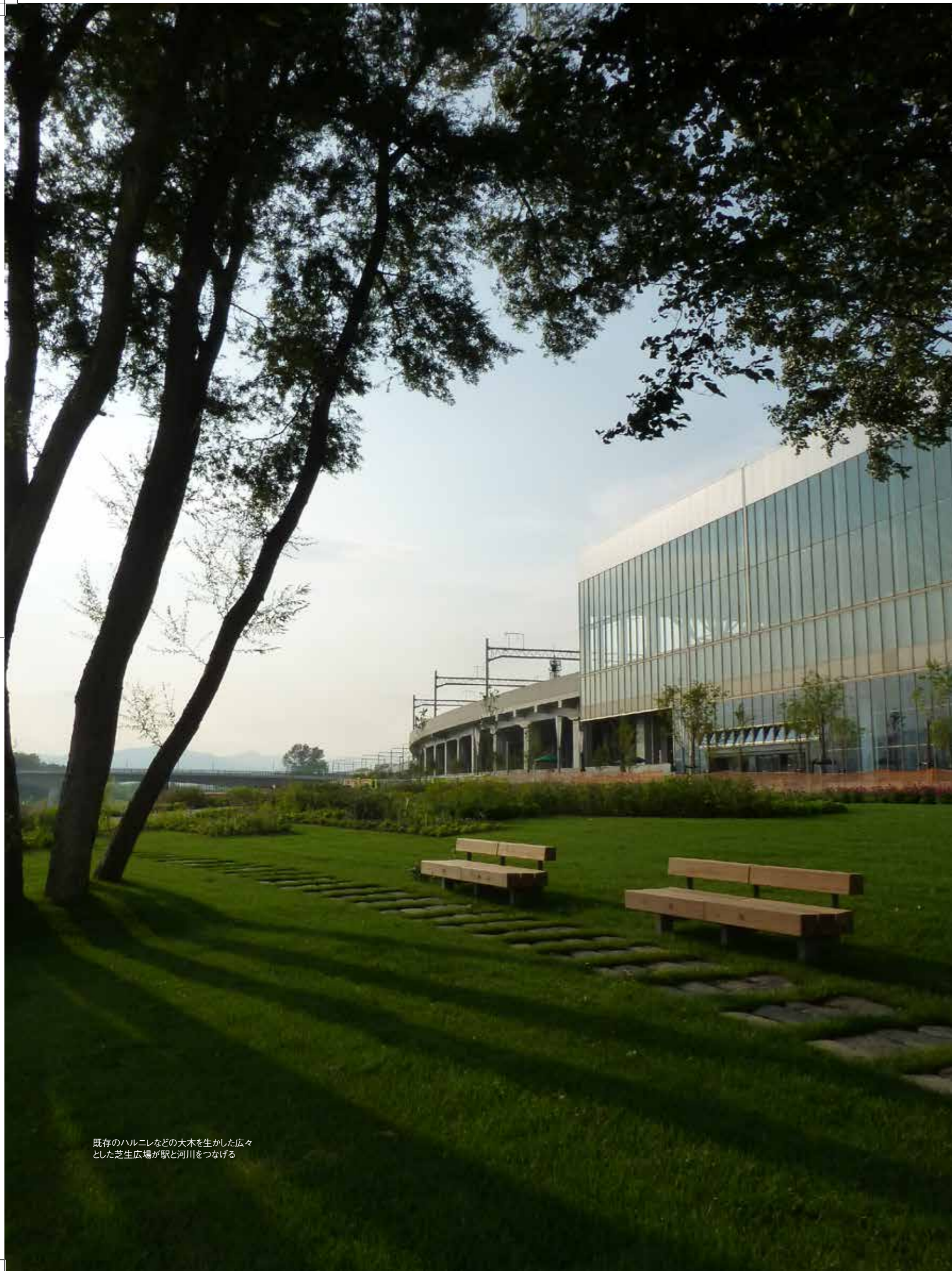
Garden Design by Takano Landscape Planning Co.,Ltd, Greenery and Flowering Consultants Co.,Ltd
Station Plaza Design by Docon Co.,Ltd, D・M, Naito Architects & Associates
Text by Shuichi Murata (Takano Landscape Planning Co.,Ltd)
Photos by Takano Landscape Planning Co.,Ltd, Asahikawa City

北海道旭川市の中心部、以前は「駅裏」と呼ばれ市民にとってなじみの薄かった旭川駅と忠別川とに挟まれたエリアに、旭川の「顔」となる大規模ガーデンの一部が完成した。市民はもとより、観光客、野生動物も含め多くの人々が、都市と融合した中心部とは思えない程の緑と草花につつまれたナチュラルなランドスケープ空間の中、憩い、楽しみ、様々な活動が展開され、新たな旭川のアーバンライフスタイルが生み出され始めている。

事業背景

旭川市では、平成2年に中心市街地活性化のために旭川駅周辺整備計画の検討が始まり、20年以上の歳月をかけ、JR線路高架化、駅舎建替え、公園整備、河川改修、3本の橋の建設、土地区画

整理事業が実施されてきている。この土地区画整理事業において、街の賑わいを生み出す日本で初めての恒久的歩行者専用道路である「買物公園」と駅を結ぶ先に忠別川と一体となったオープンスペースの創出が計画され、その一部をガーデンとして整備する事が検討された。この検討を行なう中、近年、北海道を庭園のように美しい島にしようとする市民運動「ガーデンアイランド北海道」に始まり、8つの観光庭園を結ぶ観光事業である「北海道ガーデン街道」また、4ヶ月にわたる「北海道ガーデンショー」の実施などを通じ、北海道は現在、ガーデンムーブメントが起きており、その流れを受け当初は通常の公園および河川緑地空間として整備するところを、ガーデン空間として整備する事となった。



既存のハルニレなどの大木を生かした広々とした芝生広場が駅と河川をつなげる



草花に包まれた木陰の下でゆっくりとくつろぐ

疎林の中草花に包まれ過ごす「疎林テラス」

旭川が誇るまちなかのオアシス・リゾート

先に述べたように、北彩都ガーデンは、旭川市の街の中心部、旭川駅に直結し、忠別川に寄り添う他に類をみない立地に位置している。このため、自然と都市をつなげ、中心市街地としての賑わいとくつろぎを提供する役割を担っており、そこにおよそ19haの広大な敷地に自生種を多く使ったナチュラルで気持ちのよいリゾートのようなガーデン空間を展開した。街の賑わいを背景に駅を抜けると、雄大な忠別川の景観が広がる。この雄大な自然空間と呼応し、とけ込むための空間として既存のシンボルツリーを中心とした大きな芝生広場、疎林及びテラス、ナチュラルな草花空間、水路と比較的シンプルな空間構成としながらも奥行きのある空間となっている。設置したファニチャー関係は地場産業である旭川家具と共同して制作を行ない、敷設した敷石は以前街中の車道に用いられていた石を再利用することで、旭川のまちの記憶を継承した旭川ならではのデザインとした。

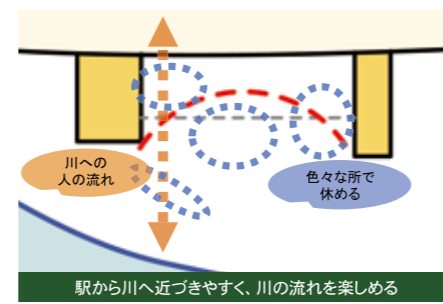
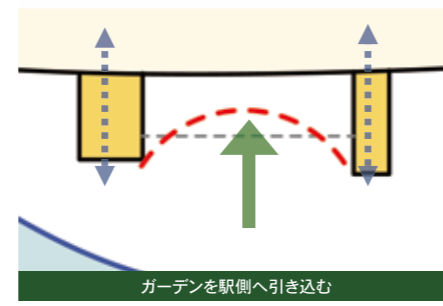




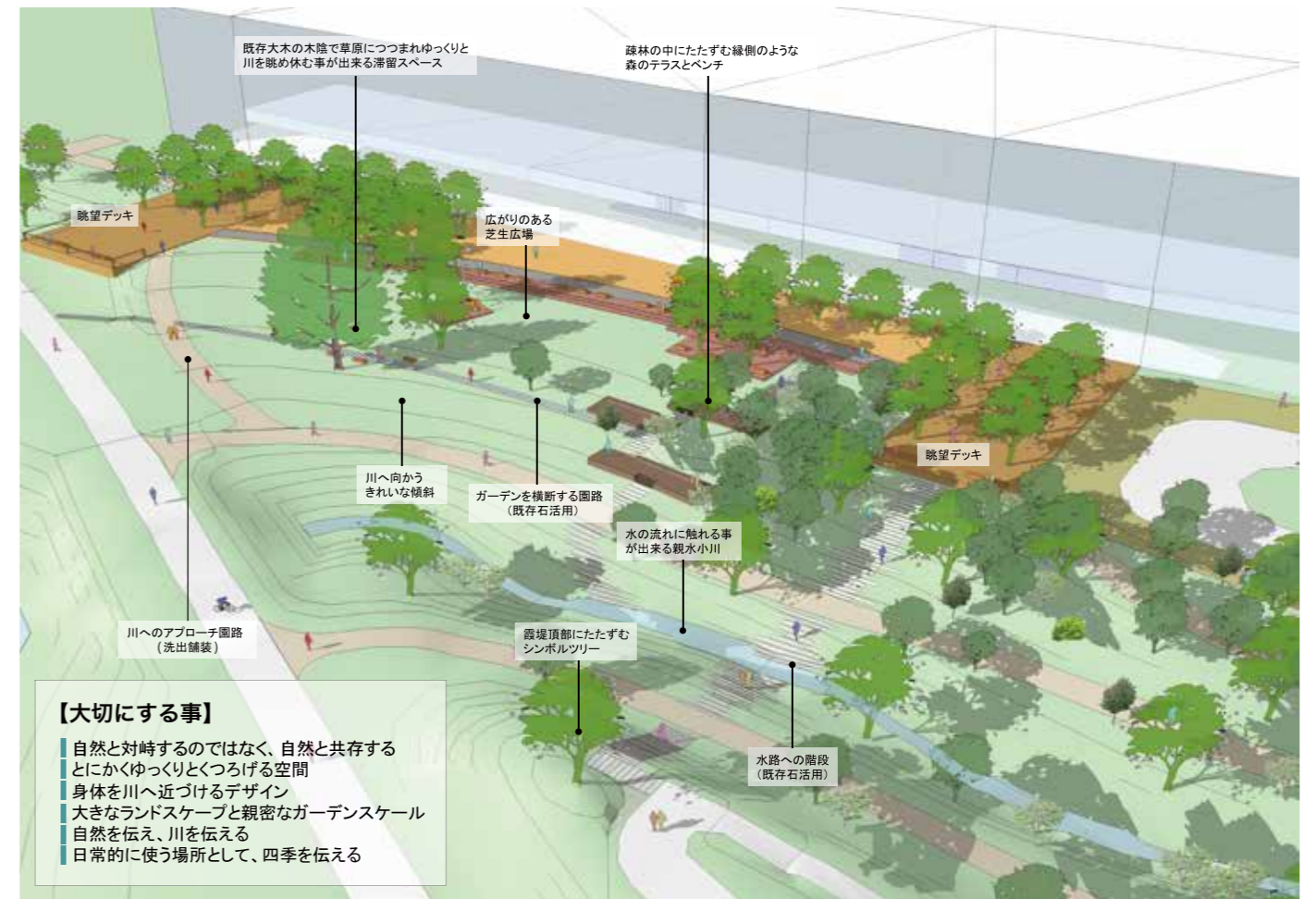
駅と河川とが直接つながる、緑に溶け込んだ大階段



電車をガーデンのテラスで語らいながら待つ



旭川駅南エリア デザインコンセプト



【大切にすること】

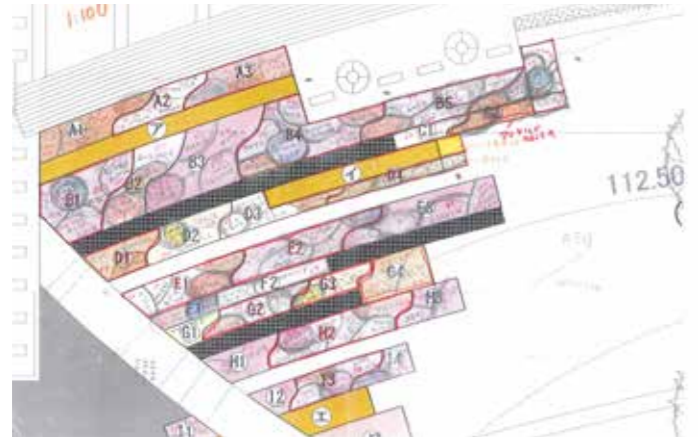
- 自然と対峙するのではなく、自然と共存する
- とにかくゆとりとくつろげる空間
- 身体を川へ近づけるデザイン
- 大きなランドスケープと親密なガーデンスケール
- 自然を伝え、川を伝える
- 日常的に使う場所として、四季を伝える

自生種を活用したガーデン

植栽デザインにおいて、駅に近いエリアでは、旭川の伝統工芸である優佳良織のパターンを参考に色の帯をつくり出し、駅側の方には園芸種を多く、忠別川側に行くに従い自生種を多く用い、都市と自然を結ぶ空間をつくりだした。はっきりとした植物の帯をつくるのではなく、帯の中で微妙な色の違いや花の形の組み合わせをつくりだし、ナチュラルに見せる方法を取っており、一つ一つの花を楽しむと共に、空間全体としてのやわらかくおおらかな雰囲気(ランドスケープ)を楽しめるものになっている。また、北海道の強い季節変化をいかす植栽をおこない、季節ごとに美しく草花が咲き、秋口には草花の葉の紅葉や枯れて残るその姿も美しい景観をみせ、初冬には、あたり一面に美しい霜が広がる四季を通じて楽しめるランドスケープが展開している。



河川に向かい色の帯が連なる



エキナセア、アスチルベ、オミナエシなどで色の帯をつくるとともに、ディスカンブシア、ニシキギで帯の骨格をつくりだす



河川側にはヨツバヒヨドリ、ワレモコウなどの自生種が広がる

みんなでつくり、みんなで育てるガーデン

北彩都ガーデンは、計画段階から市民による検討会議が開催され、駅に直結するエリアの多くの部分において市民による草花植栽が行なわれ、いわば市民協働によってつくられたガーデンである。現在も定期的なシンポジウムや座学、実践型講習会を開催し、市民の方と共に汗を流してガーデンの管理を行ってきている。今後このような流れや取り組みを継続していく事で、公共ガーデンの使命として、みんなで育て、多くの人に広く親しみ愛されるガーデンとしてきたいと考えている。



市民により植えられ、現在でも毎回30名を超えるボランティアの参加によって定期的な管理がされている



休日になると様々なイベントが開催され、一気に賑わいが生まれる

街中ならではのガーデンの嗜み 新たな旭川のアーバンライフスタイル

街中であり、駅に直結しているガーデン空間だからこそできるアクティビティがこのガーデンにはある。駅の待ち合いは構内ではなく、ガーデンの芝生やテラスで。出張の合間に、ガーデンでワインを1杯。日曜日には、イベントが開催され、子どもから大人まで多くの方が賑わう。ガーデンがオープンして間もない今でも様々なアクティビティが展開されており、今後より生活の中でこのガーデンを思い思いに活用すると、きっと生活が豊かになると信じている。

2015年には全面オープンを迎える。今後より一層の市民活動が行なわれる事で、北彩都ガーデンが市民の誇りとなり、他からのあこがれとなる旭川ならではの豊かなアーバンライフスタイルが地方からの爽やかな発信として伝わってくる事を強く期待している。



あさひかわ北彩都ガーデン/ まちなかのオアシス・リゾート

所在地	北海道旭川市宮前通西
主要用途	公園、河川緑地
発注者	旭川市
設計・監理	ガーデン設計 / 高野ランドスケーププランニング、緑花計画 駅広場設計 / ドーコン、ディー・エム、内藤建築設計事務所
施工	委員会運営等 / 日本都市総合研究所 丸蔵、翠光園、坂田植木、緑造園、北海道相互電設、大協、太陽緑化、平間造園、いずみガーデン、緑建産業、緑土興産、岩戸造園、新見産業、駒西組、道北暖房設備、岩戸造園、イハラ
工期	2012年~2014年
仕様	景観資材 / 洗出平板、枕木、御影石平板、札幌軟石など 植栽 / ヨツバヒヨドリ、オミナエシ、オトコエシ、ワレモコウ、ススキ、ヤマアワなど約300種
規模	19ha